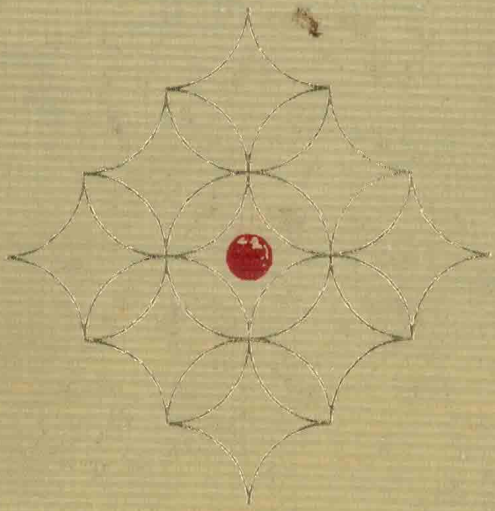

現代日本文學大系

3

尾崎紅葉　內田魯庵
廣津柳浪　齋藤綠雨
集

●

筑摩書房

現代日本文學大系　3

昭和四十五年十一月十五日　初版第一刷発行

尾崎紅葉・内田魯庵集
廣津柳浪・齋藤緑雨集

著者　尾崎紅葉　廣津柳浪　内田魯庵　齋藤緑雨

発行者　竹之内静雄

発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番号一〇一―九一
電話東京(二九一)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷　株式会社　精興社　製本　株式会社　鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0393 (製品) 10003 (出版社) 4604

尾崎紅葉集　目次

巻頭写真
筆蹟
三人妻　三
二人比丘尼色懺悔　九二
病骨録　二〇

廣津柳浪集　目次

巻頭写真
筆蹟
変目伝　一三
今戸心中　一五
浅瀬の波　一五
雨　一九

内田魯庵集　目次

巻頭写真
筆蹟
くれの廿八日　二二九
社会百面相（抄）　二三六

齋藤緑雨集　目次

巻頭写真
筆蹟
油地獄　二九九
かくれんぼ　三一八
あられ酒（抄）　三三四
〔付録〕
尾崎紅葉とその作物　田山花袋　三七九
「三人妻」の人間像　福田清人　三八四
我が尾崎紅葉観　泉鏡花　三八九
父広津柳浪のこと　廣津和郎　三九二
内田魯庵論　猪野謙二　四〇九
齋藤緑雨の思い出　内田魯庵　四一四
年譜　四二一
著作目録　四三〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

尾崎紅葉集

三人妻

（一）　銭の富士

あるやうで無いものを金銭とて、天下の人の寝言にまでいうて欲しがらざるはなし。信に此金銭の獲難きことの不思議さは、鉄を吸ふには奇妙、磁石といふ神通力あるに、此は何したものと、金時計買ふ人の後に、過難に立てる納豆売の独語道理の至なり。

此物羨みの男とて、母の胎内を苞入にて転げ出し、臍の緒に糸を牽きしにもあらざるべく、二十四五の頃には随分百両包の顔も見て、其重宝なる味をも知りけらし。

羨まるゝ男とて身内に金脈のあるにはあらず、由来を聞けば孰れか額の汗の滴れて、粒々金色の御光を放つにあらざるべき。

失ひ易しと思ふ方の金銭は、皆獲難しと念ふ人の手に落ちて、あるやうで無いものとはいひながら、在る所にはまた腐るほど在るもの哉、今此日本に葛城余五郎といふ名を知らざるものなし。

此男の持てる資産を、尽く一銭銅貨に換へて聯ぬる時は、恐るべし日本国を五巻半捲きて、其余れる分を積重ねて見れば、富士山の高さの六層倍、と入らざる事を統計家の伝へ侍る。

これが一人の宝なり。念へば裏借屋の奥に家内五人暮し、夕暮になれば文久四ツ残る日を、一年中の安楽日として、朝は芋の尾を粥に啜り、午餉は大方抜にして、晩が南京米の雑炊といへる輩の、天から授けられたる配当を、優勝劣敗の理にやられて、かゝる人の弗箱に吸ひ取られ、旨くした男は神か国王かの如く振舞ふに、下根弱肉の大勢動物館の山犬ほども食うた例無くて世を送りぬ。

万国何方にも無慾の人といふは無ければ、金銭の置場に当惑して、竹箒に懸け箕に入れて、之を大道に捨つるものゝあるべきやうはなきに、何処いかなる所にて、余五郎はさほどの蔓を見出して儲けたるぞ。手を三ツ鳴せば忽然として千円札の降ツて来る奇術を得たるものならむ、と余りの訝しさに素生を糺せば、加州金沢在談義所といふ村に、鳴るは滝の水日は照れども、絶えず陰のごとく幽けき土百姓の次男に生れけるが、天性の利発土なぶりを憂き事に思ひ、十七の年国元を逐電して江戸にさまよひ、一二年は便る方なさに乞食の真似もして、それからの出世の小口、湯屋の木拾に成りて、人の中なる溝鼠、之もおもしろからず。頓て蕎麦屋の担手に入込みて、少時働きける中に、始めて眼孔の木眼ならぬ人に見出されぬ。それは大原富五郎とて流声の鉱山師なりし。

余五郎其時二十四なりしが、機敏鬼神の再生、と大富も舌を巻きて手足の如く頼めば、余五郎も此奴骨ありと服して勤めける程に、立身衆に抽えて、一年の間に世智賢きものばかり聚めたる二三十人の上席にすわり、大原組の一番番頭余五郎の下に様の字を附けられ、会ふものゝ首は先方から下りぬ。其中には四五年前には、附くな〳〵と袂を振りし旦那様もあるべし。

余五郎二十八の年、大富一生に唯一度の見込違ひより、見事に身代を叩き、借財忽ち山のごとく、之に心挫けて勇しき了簡の失せけるを、芥子の胆と余五郎心に頼もしからず、言葉を尽して励せども肯かず。此蹉跌が病の源となりて、間も無く大富は亡くなりけり。

其後は余五郎鉱山に限らず、どかりと儲かるほどの事には、先鞭に首を入れて逸す事なかりしに、折々の些細の損は、一度の大儲に埋合せて、次第に仕出しける上、明治維新の紛擾に紛れ、為たい三昧の甘い事して、一網に五六万の利益は、其折わづか十五両で買置きたる地面の、泰平になりてから暴に二千円になりけるなど、さる類の多かりし。

明治の世となりて万事に欧羅巴を写す気運に伴れ、舶来の儲口潮のごとく、滔々と寄せ来るを此時と、世間は成らぬ事に念へる三千里の荒海を押渡り、日本にては一銭に十個するほどのものを、珍らしがる毛唐人に五弗十弗に売て、又其邦の下らぬ物を買集め、持還りて都人の心を動かし、之にても亦算盤の外の利益。唯奪たも同じ様なる手易さに、金銭が金銭を招ぶとは此事なり。

それより類異れる商社を四ツまで立てゝ、股肱の才物に預け、其外抜目なく八方へ手を拡げて、四天王に麾を取らせ、自家は風流無慾の顔して、都外の閑静なる処に、華族かと人にいはるゝ居宅を構へ、其四辺の地面は、眼の及ぶ限り我垣の内にして、庭に追剝の出でしと噂されけり。

商業の事は一切手代委せにして、我は有金を我一代に費ふべき工夫に、屈托してゐる事と誰も想ひけるに、此身代になりても更に満足する事なく、箸の上下にも銭儲に肝胆を砕き、之はと思ふ計画浮べば、酒盃を投捨てゝ馬車を急がせ、腹心の手代に計を含め、唯二三日の中に、人間一四二代は懐手しても、楽に暮しのなるほどの商ひすれば、如何様道理と、世間は余五郎が大抵の贅沢に驚かず。東京間近の名所名所には、葛城が別宅の瓦屋根を見ざる事なし。

ある夜の酔紛れに、泉水の月を観めて、此景色の好さ、我は未だ須磨の秋といふものを知らず。人の話に虚誕なくば、いつぞは見たいものといへば、御招伴に正座りたる男、此御庭先より鉄道を布き、風呂場、料理場、お寝間、お座敷附の汽車を造らせ、お浴衣のまゝづいと御出は什麼。余人は知らず御前の力なれば、訳も無い事といひしは、追従なれども其ほどの金力は確にある身分にて、其もをかしからぬにあらねど、今というても今の間には合ひ難し。早い所は須磨の写真を買はせ、此月の前にて見たらば、興は薄かるべきも亦変りて旨い分別ではあるまいかと笑ひぬ。かの男聞きて、あの心懸にては此身代当分は傾き難しと陰言をいひし。

乞食までせし金沢在の土百姓、商業に懸けては豊太閤の弟分なり。乱世ならば随分天下も取りかねまじき器量。一は運といひながら、真似のならぬ事なり。

其昔蕎麦屋の担夫せし折は、容貌何処か狸のごとく、人は狸余といひ囃して、此行末を思ひ懸くるものは無かりしが、今は二頭立の馬車を軋らせ、猟虎の皮の膝懸、白鶴の羽織の敷物に、悠然として薫らす葉巻の灰の、風に飛ぶ一片が何銭といふ身にならば、狸のやうなる御顔も可笑気無くなりて、頤髯、八字髭、尚又縮れたる頭髪までが威儀の飾となりて、彼は葛城といはるれば、知らぬ人も畏しがりて、いかさま尋常ならぬ面魂と皆見送りぬ。

同車は束髪の白襟紋服の女なり。年の頃四十約なるが、痩乾びたる容貌の中に、剛としたる処と凄まじき気色のあるは、柳の大木の秋に遇ひて、葉を振ひたらむ風情なり。加之下司なる処ありて、奥様の胴に遣手抔の首をすげかへたらば、かくやと想はせぬ。此女麻子とて余五郎の妻なり。おぼろ気に昔を知れるものゝ語るを聞きしに、湯島天神の境内に、其頃名代なりし矢場女のよし。

今は焼消して灸の痕のみなるが、始めは左の腕に蜘蛛の肉繡ありて、蜘蛛のお重と異名とりし手練ものゝ、網にかゝる男は羽翼縛になりて血を吸はれざるはなかりし。

今の葛城大尽、その頃の狸の余五郎、尻切半天に馬のやうなる脚を露して、逢はで還ればと通ひけるに、嚙みさしの小楊枝も吐懸けまじき素寒貧に先方から熱くなりて、行くたびごとに小使を拈り、上に引張るものから下帯までも仕送りぬ。

漂母の一飯立身の種となりて、今も余五郎に捨てられず、奥様と崇められて協はざる望も無く、千両役者の三四人も家に呼びて、地声で世事をいはるゝやうになりては、世の中もをかしからずと、悟りすまして浮きたる事を慎み、無法の華美を好まず、人に昔を知られぬやうに、夫の名を濟さぬやうにと殊勝の志を起して、何処までも生れからの奥様に振舞ひ、万事を鷹揚にして、情を深く下を愍めば、誰もころりとやられて、此奥様なくては葛城の家は闇夜の月、光る眼玉も恐が

られず、出入の男女生神のごとく敬ひ奉る。

（二）　天辺の楽

衣食住は人の心を苦めて、此中一ツの不足も煩ひの種となりて、三者具足の願ひばかりに、大方の不性者も、否々ながら手足を動かし、少し活潑なるは身を粉に砕くぞかし。

頓て此三者の足れるといふにあらでも、纔に余裕のつく頃よりは、又外の慾出でゝ、養気といふ事を念出し、無理なる工面もして折々は命の洗濯。世の男心の天辺の楽み、女色の外にあらざるごとし。連添ふ女天辺の苦労も、亦我男の浮気なるべし。

熟々惟るに、建国の始めには民尚武の気に富み、刀鎗を野辺の白茅ほどに思ひ做し、生首を見ること西瓜のごとく、女までが人の血汐を唇に塗りて化粧せしほどのあらくれたる国も、数百年の間に驚くべく進化して、髯ある奴が白粉傅けて姿に気を揉み、華車な事の穿鑿を第一にして、千万の遊戯に精を竭し、骨を休め気を養ふ事のみを考へ、今世界に開化せるといふ国々の有様を見るに、どうやら大きなる玩具箱のごとし。

その代りには太古より数百段賢くなりて、勤むる所は屹度勤めて、銭儲もおろかならず、おのれの一分は立てゝの後の洒落なれば、之を嗤ふものはあらざれど、可成は此性根にて祖先建国の始末をおもひ、黒木の柱、木葉衣、鳥獣の肉の摸倣にて行かば一入好かるべきに、さうは行かぬ理のありてや、万国何方も開化の国の贅沢、言語に尽し難く、我邦の人々曾て夢にも見ざる事多し。

一人の身の上も一国に異らず。壮年刻苦の善根より、美果累々と実りて、衣食住に事欠かず、裏には土蔵二十戸前、日本橋から眺めたやうな景色。他人の物と見てさへ胸の清すほど快気持なるを、悉皆貴下の物と耳端に囁く声して、之ばかりにても十分なるに、まだ外に鉱山幾箇、地面何百箇所、繁昌なる商社を数持ちて、招かざるに来る金利ばかりが月々何千円。出来も出来たる長者の心には、おのづから乞食の昔忘れて、分相応の栄曜は我からせずとも世間が許さず。為て見るほど面白くなりて、金でなるほどの歓楽の数々、一順仕尽して見れば、兎角自由の利くは無理なる処ありて、興の薄きが本意無く、金力ではどうもならぬやうな遊はあるまいか、と髭を撚りて、麻子の横顔に新橋の酒の気を吹懸くれば、打笑ひて、何事も苦き中のおもしろさ。湯島に在し頃、正月三日の雪の夜に、此方は地廻六七人に打撃かれ、命も危かりし中へ蜘蛛のお重が飛込み、私の大事の男をと泰平楽をならべし時、見物の中より狸の助六と声を懸けられしやうな、面白き事は此後またとはあるまじといへば、余五郎額を撫でゝ、過去りし昔はいふないふなと寝床へ遁入りぬ。

山瀬といふ手代は聞ゆる粋者、之に思はくを話せば、当時柳橋に柳屋の才蔵といふものあり。姿色万人に秀でゝ心慧く、諸芸に堪能にして、応待の上手此上無し。年齢は二十一の由なれども、打見は十八九を越えず。之を雛段の上に置くならば、誰も「者」とは思ふまじき上品さ。水を向けて口を開かせなば、いやはや弁舌滑々として前なる河も逆に流るべし。

此女を聘でのおもしろさ、肉も骨もあつたものにあらず、大仏様も蕩けて流れて柳屋の金銭の泉、昼夜を舎てぬ座敷のせはしさ。美人品切れの当節柄、客はいづれも餓鬼のごとく、眼色を変へて影随ひ、我手に入れむと、金銭を吝まず、名を惜まず、顔を潰し、命を捨てゝ懸かれど、木像の普賢菩薩か、絵にかける小野の小町よりも、舌頭の甘いだけ面憎く言ふ事聞かず。何の某といふ待合の女将軍も麾を投げて、此子帯留の金具に珊瑚の瓢箪を附けたる間は、到底転ばじと洒落たり。

まことに浮気ならぬ深間ありて、さる会社の臭き所を勤むる、菊住何とやらいふ男に情立て、古風の誓文お前一人の中と聞き及ぶ。人の噂に違はず、此女の手剛さ。我等も見事に弾かれたる一人なれど、委細を申さば色男の名折、概略はかくの通り。兎にも角にも一鞍御試しあるべし。先は金轡にては行かぬ代物、近頃御徒然の折から変りたる

御慰みと語るに、葛城大尽勇み立ちて、これより直に案内せよと急かれ、用ある身なれど何も主命と是非なく、荒気の大将一戦に仕損じて、同席に恥辱掻くも辛し、手際を見るもをかしかるべし、と後に尾きて立出づれば、白拍子などへ通はむに馬車は勿体臭くして風流ならず、綱引で宙を飛ばすべし。

（三）　沈香亭

万端山瀬が取計らひ、葛城大尽は白檀の床柱に倚れて、鷹揚に頤髯掻撫づる指の金剛石、座敷の前後十二畳を照らすを、番の下婢が噪ぎて一同に注進すれば、板前の伝吉まで飛出して後学の為、と隙見する人数隣座敷の襖の陰に山を成し、偸めども足音人声の聞こゆるを、何かあるかと大尽に咎められて、御前に侍へる下婢は挨拶に困り、唯今彼方に参りし役者の帰る所と紛らせば、其方も見て来いとの仰せになほ困りぬ。

一時間ばかり待てども才蔵は見えず。長いの、と大尽酒の旨うなさうな顔色。今一度見て参れの御意なき内、下婢は心得て、他のお座敷を貫て参るやう申遣はしましたれば、少々暇取れまする理、おツつけ見えませうほどに、少時御辛抱遊ばされまし。なほ迎ひを遣はしましょと銚子を以て立ちけるが、頓て還りて、やう〳〵只今見えました。

強い勿体の待たせた罰には、座にも着かせず一嘲弄して、其舌戦の摸様を御前の御看に、と山瀬は酒に舌を湿して待つ所へ、才蔵昼間からの無理酒に傷みて、歩行ふら〳〵と次第なき態度。海棠しどろに雨を帯びて、春色今を闌なる姿、沈香亭の図を歌麿が画いたらばこんなものなるべし。

袖を牽かれて払ひし人のありとは心着かず、二人を一様に初対面の時誼して、風俗一目に位あるべき御方と、三指懸りに挨拶するを、山瀬は心に可笑く、才蔵が面を擡ぐるを伺ひ、其方は見忘れても、此方は遺恨ありて忘られぬ御方へと盃させば、これは〳〵忘れては済まざる御方を、此通りの体裁、何事も酒の上と堪忍遊さるべしを発端に座敷浮き出して、馴染無き大尽も頗る興に入りて、てんと堪らず。十二時近くなれども帰るとは御意遊ばされず、折々目顔にての合図、山瀬は確に其事と合点はしたれど、到底成らぬ相談と知れば、左右なくは打て出でず。打て出づれば取て投げらるゝは眼に見えても、頼まれた因果には否もいへず。さらぬ気色して冗談口を吐きてありけるが、折を見合はせ下座敷へ呼出せば、山瀬様雛助様への御伝言か。柳橋中に知らぬものなき恋中を、罪深くも隠立して、薄闇い処へ我を招込までも、天下晴れてかう〳〵と、立派に伝言を頼むだがようござんす、と早一義を言出させぬ仕掛なり。

山瀬もさるもの、こんな古手には少しも騒がず。山瀬といふ男自分の恋に人を頼むは大嫌ひ。さればいつぞやも其ゆゑにこそ振られたれ。座敷にござるは此方の主人といへば、其で承知の理の葛城余五郎。格別冗い事をいはずとも、此方に用とは知れきつた訳、と半分聞きて其だけはと早立ちかゝる。

引留めて、下に居やれと、何処かの三味線を合方にして染々口説ば、立聞く女もあらば其が第一靡くべき上手に、才蔵も持余して、遁るゝ路なく、申すは家暮なれど、男には一切肌触れぬ心願ありてと、しやう事なさに秘したき事を匂はすれば、其も知らぬにあらねど、心からの浮気にあらぬ、勤めの余儀なさに其人も定めてゆるさるべし。

今まで転ばぬを看板に売出したる名の、唯一夜にて折れむことを口惜く思はゞ、其回復のなるほどの事は、屹度山瀬が命に懸けてもすべし、と第一金第二金第三金第四金の奥の手で行けど、吭も鳴らさず。冥加に余る御志は嬉しけれど、私に彼人あるを御存じなればなほの事、貴下にも覚のある御身にて、他の恋ならば壊しても苦しからぬやうなお言葉は、近頃粋にも似合はぬお心意気。

一言唯といへば今の間に徳の行く話、私とて慾を知らぬではなけれど、其に背中向けて思ふ人に心中立てるが、ちと当世に向かぬは知らねど、張とやら意地とやら、そんな真似して何になる、と若い了簡

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

を嗤うて下されな。

相手は流声の葛城様、紅襟の慾気少なき子達でも、此方から強売する気になるほどのお方を、酔興らしく振るといふも、申す通りの次第なれば、何卒お心に障られず、御前へよしなに貴下から、と酒を醒ましての言訳に、此上はとて鶏を殺るやうな手暴もならず、請賃無しで沢山聞され、用も足ずに此まゝ手を退く器量の悪さ、と山瀬は苦笑して立上りぬ。

取り残されたる葛城大尽下婢の酌に寂しき小飲して、相談の暇取るは事の難かしきか、但は聞ゆる悍強を山瀬が乗鎮めに懸れる故か、と然までは退屈もせず、半分は楽みにして待けるに、裏階子より足音して山瀬はぬつと入来り、案の如くといふ冒頭に力落して、不成かと顔を差寄すれば、とても〳〵と首を掉りて、不肖の力には及ばず。此次には自身御出馬ありて、一攻攻めて御覧あるべし。今宵は兎も角も此儘御帰りと勧むれば、大尽梓弓の張つめたる弦断れて、くるりと撚れて復りたらむやう味に気が抜けながら、未練残りて才蔵はいかゞせし。唯今参るべしといへば、左様かと落着払うて、更に御腰は動がず、今一目御覧じたき風情なり。

山瀬は羽織の紐を結び懸け、早御帰館あるべし。此処でまた酒にしては、此方も照れゝば女も照れ、殊の外場合の宜しからぬものなり。女の急に参らぬも、其辺を計らうての事なれば、此処はいざ〳〵御立と急かれて、大尽いよ〳〵本意なく、さればとて一騎残りても功名の成難きを見極め、しぶ〳〵帰支度する所へ、素知らぬ顔して才蔵出来り、小取廻しに大尽の後より外套着せ懸け、帽子手袋を持ちて、離れがたなきやうに跡を追ひまはし、近日に是非。今夜は飲過にて失礼のみ、と今方振つた顔もせぬ挨拶。愛嬌滴るゝばかりの眼元を大尽屹と視て、近日口語に来るぞ、と戯れの中に執念あるやうな言をいへば、弾器仕掛の胴懸して屹度お待ち申しまする、と之は真実の中に嘘あるやうな口上を、憎しと山瀬が側から、胴懸よりは此方の心が弾器仕掛、好具合に出来た芸妓めと肩をたゝけば、才蔵も一言なくて、とんと山瀬を式台へ突落しぬ。

茶屋の女房始め七八人の下婢ども見送りに居並びたるが、此体にさざめくを木の頭、御客様車に乗移れば、綱引提灯を振立てゝ、がらがらと引出だす後に、御機嫌ようの声々も鎮りて、門の燈火の幽なるを、車小橋を渡る時大尽迢に眺めやりて、思ひなほ残る顔に川風吹きて、酔心涼しくなるまゝ半睡むと思ける間に、我門近き道端の小石に車揺れて眼覚めぬ。

後を見れば続く車無し。如何せしぞと車夫に問へば、明朝用事あれば此所にて御別れ申すと申上げよとて、途中より曲られましたといふ。

大尽臥戸に入る頃酒醒際にて、水二三盃に胸清き、睡気は洗ふごとくなくなれば、才蔵の姿心に浮びて此儘に捨難く、幾度の反側に思案しかへて、手に入るゝ工夫せしに、屈めたる足を思はず踏伸し、扨あるわ。之を山瀬に聞せたらば、それぞ上策と雀躍すべし。とかく韓信は彼の事、此謀計を授けて働かさば、万に一つも仕損じはあるまじ、と独り悦に入りて、安心からやう〳〵睡気さし、枕頭に喚ぶ声に驚されて、何ぞと半眼に四辺を見廻せば、窓帷の紅色に日影麗々と、軒なる音呼の羽搏手に取るごとく、最早何時と大欠すれば、侍女畏りて、十一時でござりまする。唯今山瀬様が見えられました。お風呂が沸きましたれば直にお召し遊ばしまし。

むく〳〵と起出で、一風呂浴びて表座敷に出づれば、山瀬は睡むさうにもなき顔色にて今朝二件ばかり用を足して参りたりとは、有難き心懸に対して、いふも愧しき次第なれど、昨夜は寝ずに妙計を案じたり。附ては又尽力頼まねばならぬといへば、山瀬はから〳〵と高笑ひして、二度有る事は三度有る例。また失敗でござるかな。昨夜は随分死物狂になりて力めたる苦戦の模様、御笑草までに御聴き下されたし。なるほど其を肴に一杯と、侍女を呼びて用意を申付くれば、大尽日頃の大短気、何事も速くなくては御不機嫌に懲りたる家内が技倆の凄さ、左慈が松江の鱸魚を鉢から釣上げたほどゝ、始めての客は誰も驚入る酒肴の支度、珍膳五十人前も咄嗟の中に調ふは此家一の名物な

りとかや。

美しき侍女二人膳を運びて、一人は御酌に控へ、一人は通ひを勤めぬ。用あらば呼ぶべしと大尽人払ひして、扨山瀬どうであつた。

聽きて興あるやう嘘も少々加味して、下座敷の薄闇に才子佳人を説くの条を逐一弁ずれば、大尽膝の進むを覚えず。そんな事と知りせば立聽してくれたものをと切りに無念がりぬ。其につけても才蔵といふ女はいはうやうなき怪物かな。我従来千百度も女に出会うて、曾て不覚を取るといふ事無かりし。これ我威光か、金力か知らねど、兎に角眼指せし女の自由にならざるは、主ある女か、人の娘か、これはさもあるべき理なれども、売物ならば男嫌ひであれ、振自慢であれ、葛城余五郎と名乗りかけてぐつと睨めば、ばたり〳〵と将棊倒しにして、花柳の街を行くこと、鉄の草鞋穿きて草原を馳廻るがごとし。

いかな粋でも通でも、濡事師でも我と聞く時は、黄金無垢の業平が来たわ、堪らぬと帯引結めて遁去るほどの男なるに、少敵と侮りて此度の不覚。これ一代の名折なり。

されども此示威は表向にて、内実あれほど心に称ひたる女は、今に一人もあらざりし。一昨年京都めぐりせしに、彼地はいかさま美婦多く、いづれを見ても絹漉の肌膚、鴨河上水の寒晒、玉の如しとは蓋し彼等をいふなるべし。

その芸子といふ奴、美の美天人の妹分かと想ふほどのにても、金次第にて踏でも蹋でもよい事に定まりたれば、余り正札過ぎて、勧工場の買物同然にて趣無く、かくては、天人でも菩薩でも心意気が知れて、移香もどうやら銭の臭がするやうにて、嬉しからぬと念ひし所為か、どれを見ても護謨製の女人形腹を押せばぴいと啼くだけの器械にて、色が白うて目鼻立がばらりとして、姿と声が優しいだけの沙汰にて、外に何もあるにはあらず、と京女藺は雛の面も一向嫌ひになりぬ。

其とは事異りて江戸の婦女の好さ。しげ〳〵顔を視れば面道具の揃うて、絵に画きたしと思ふはなく、眼の好きは鼻ひしやげ、眉が好ければ口狀しほらしからず。干潟の髪際あれば乱杭の歯行あり。第一色の黒さは我見ても気の毒なるに、肌理疎きことは柚の皮を張たるごとく、鼻翼の辺には面皰のあとの脂に埋れて黒きなど、故障あらざる顔とてはなけれど、出額は出額にて可愛く、垂眼は垂眼なりに愛嬌ありて、万更捨てたものゝあらざるは、心意気に名物の旨い処があればなり。

かの才蔵と云奴意気に一節ありて容顔も凡ならず。見るほどの男の思ひ悩むべき骨格。柳橋の芸者でござる、と日本中引廻しても鼻の曲らぬ女なり。かほどの珍品を名も得知れぬ痩男の玩弄にさせ置かむは、言効無さの限りといふべし。

かくいふ余五郎が土蔵には、世界に又と無き宝の数在りながら、此品一箇欠けて寝覚の心懸りとなりては、不自在せぬ為の此富も所為無き事なり、と箸を逆手に膳を拍て、執心面色に見はれぬ。

山瀬もこれほどの発慣方に驚きて、さほどの御志ならば、高の知れたる猫一匹いかにともなるべし。まづ其妙計を御聞かせ下されといへば、大尽声を潜め、これ頗る反間苦肉の謀計なるが、足下の曖妓に雛助と云ものあるよし、と真顔に切出されて山瀬頭を掻き、曖妓といふ訳にはあらねど、ちとばかり。些ばかりにては計大いに妙ならず。遠慮無くいはれよ。其女に大事を頼みて気遣ひあらざるほどの御中か、と念をおされて山瀬も挨拶に当惑せしが、まづ此方の思慮にては、いかなる大事か知らねど、大方の事は引請け可申きかと答ふれば、なほ種々に念を推して、山瀬が言葉の中に、聢と深き中に相違なき処を見届けたる上にて、詭計をしか〳〵と語り出せば、一々聽きてなるほどの頷き、或ひは首尾好く参るか知らねど、格別新手にもあらざれば、十全の上策とは申難し。

相手は金気無き奴なれば、此方を片附けむに何の事はなかるべきも、本尊の女があの代物ゆゑ、と頻に首を拈れど大尽は遁れ為済まし顔にて、才蔵いかなる情知といへども、一方には男に退かれ、一方には金と義理とに逼られて、厚き氷も火上に解くべし。古来より此手にて行かぬ女無しと、独断にして勇立ち、手函の中より軍用金攫出して、当

座の入費、之を持つて早く／＼。

大尽の計　どうやら妙ならず思へど、いかに成行くか我も面白さに、然らばと請込みて直様車を飛ばし、柳橋なる雛助方に来て見れば、昨夜の徹夜、酒と疲労に虐まれ、朝湯に入りければ身は綿のごとくなりて、小座敷に炬燵して正体なく寝入りたるを、旦那様の御入来と母親の駆込みて、抱起せども現にて又手枕に仆れぬ。

母親持余して此始末といへば、構ふな／＼と山瀬は其座敷に入来りて、やう／＼眼を覚ますれば、夢ではないか、珍しやと、嬉々手水つかひに行きしが、頓て衣裳をあらためて入来り、炬燵に蹲まる男の帽子を引取り、半座を分けたるやうに寄添ひて、此頃の遠々しさを怨じかくれば、まづ此方からいひたき事あり、と葛城が才蔵に執心の次第を語りて、此念は何ありとも霽らさではおかじとの決心にて、此方結ぶの神に頼まれたるが、爰に一つの詭計ありて、其には其方を味方に附けたさに来れる男なり。

詭計といふは畢竟菊住との中を裂きて、金と義理との板挿みにせむとの殺生なるが、かの中を裂かむは容易の仕事にあらざれど、一人腕ある芸者を見立て、万事を明かして宜しく之に含め、やいの／＼で菊住へ持懸け、それから大熱々に上せて見せて、卿楊枝で赤い顔して暮らせるほど男に仕送らせる寸方。此金は葛城の手許より仕払ふべし。

菊住今も才蔵の情には預かれど、あの気象の女なれば金には縁無く、不自由勝は知れたる事なり。其虚に直入り、陽に実意を見せて金銭で空隙なく裏打せば、男心の動き易く、鼻に着たる才蔵を捨てゝ、新出来の重宝なるに乗換る気になるは眼に見えたり。其時才蔵の事なれば、心に男の不実を恨むとも、女々敷事はよも為じ。抵抗の意地を張りて、男めに草履取らせて此報怨をせむ事を念ふべし。処を大尽横鎗に仕留めむ手筈、甘く行けばお慰みなり。

扨此狂言の立女形には、菊住の色になる奴なるが、相応の心当りは無いかと問はれて、雛助進まぬ顔色、あるには誂向の女あれど、此狂言は殺生過ぎたれば、外に最少し手柔かなる思附のありさうなもの。いふは可笑けれど何処の誰が貴下と何屋にて睦ましさうに話して居たなどゝ聞く時は、しやくりと知りながら胸穏まらず、お顔を見ると口惜くなるは惚れた中の情なるを、いかに御主人の頼なればとて、其様な苛たらしい事はせぬものでござんす。

別けて仏性のこの雛助は、話を聞たばかりで癪が起る。今にも才蔵様に会うて此次第を注進して、喜ぶ顔が見たいといへば、山瀬は冷笑ひ、いふな／＼。子まである身の山瀬を堕落して、我女房には罪とも殺生とも思はぬか。これしきの事が苛たらしうては鮪汁も食へぬ理、随分牛も豚も参る口から、殊勝い言を承まはるものかな。其方も聞伝りに銭に驚きて、気味のわるい虫が二百文ばかりと笑ひ草になる仲間なり。一度や二度は人の男を横奪して、腕があるといはれし覚えの身に、これほどの事は朝飯前と見て取ての頼みなり。

首尾好くゆけば褒美の品でも現金でも望み次第。且は我の手柄にもなる事なれば、義理と思つてやつてくれ、と酒落らしからぬ様子に女もやう／＼納得して、肝心の立者に誂向とは誰と聞けば、此地に人の知れる升屋の小〆、菊住には疾からホの字、此女ならば身銭を切りても働くべし。

（四）心配筋

葛城大尽は何も知らぬ顔にて才蔵を揚詰に、あつさりと飲みて否な眼色もせず。山瀬に口説かせし事は一時の酒興のやうに見せければ、かうした座敷の勤めよく、第一為になる客筋と才蔵も疎かならず待なせば、いよ／＼御意に召して御側を離さず、願はざる諸品まで纏頭の多さ。今晩はと十年来何万人といふ客に会ひしに、これほどの旦那はなかりし。

但憂きことは此座敷に囚はれて、菊住に逢瀬の自由ならず、二つ好き事は無きもの、と酒の中にも思出して、逢はむとならば何時でも首尾はなるべき自堕落の家業でありながら、苦界とは此処ぞ、と胸のも

やもやは絶えざるに、一夜大尽雑話の中に、不図熱海の湯治の事を言出して、この頃の余間を幸ひに四五日遊びに、明日から行て見る気は無いかとあるに、湯治場は転ばぬ芸者の伴れられ所、うるさきことをいはれて否な思ひして、御機嫌を損ふが結極と見えてあれど、尋常ならぬ贔屓の旦那とおもへば、これほどの嬉さは無いやうに勇みて、是非に随行を願へば、大尽至極満足して、翌朝随行二人に才蔵を加へ、四人の同勢新橋の停車場に入れば、見る物無さに倦飽める待合の人々、これはと眼の覚めたらむ心地して、瞬きもせで視め入りぬ。此湯治二週間余、其間に計略図に中りて、小〆はもとが菊住に岡惚の下地あれば、頼まれてする事ながら頼みてもしてみたき役目、と先此方から熱くなりて謂ふにいはれぬ仕向に、菊住も才蔵は才蔵として小〆は小〆。彼も飽いたではなけれど此も捨て難く、伝聞く昔唐琴屋に丹次郎といふものありけり、と頤を撫て之をさへ悦びけるに、気味悪きほど仕送らるゝ金員は、我月給の二倍と計算して見れば、どうやら女で食へる気になり、此帯まで買うてくれた小〆を麁末にしては、冥利に竭きむことを畏れて大事がるほど、女は上の空になりて世間を構はぬ大浮れ。謔るがおもしろしと菊住がどうかうと、座敷にて客が噂すれば、もう逢ひたくて堪らず。卒に腹が痛み出して帰るなどの悪業高じて、今は家業も余所に菊住との陰遊びにのみ念入り、あれほどの贅沢して、よくも兵糧の続く事を人の怪みけり。

小〆の分別には、一月にても二月にても才蔵がかの人の所有になるまでは、弗函に倚れたる気の高を括りて、此方から思入れ夢中になりて男の心を蕩かし、才蔵との中を遠ざくるほど手柄になる事と思へば、少時の間でも好いた男と好きな事して、遊ぶだけが徳と度胸を据ゑ、浮気するに金主ある事一世一代の法楽と、夜も昼もなくして思ふまゝに浮るゝ面白さ。かういふ事ならば明日が日死なうとも、遺憾なしと互ひに打込みて、どうもかうも成らぬ始末に、誰も手を着けかねて、沖の舟火事を見るやうに、あれよ〳〵と呆れて見物する人の噂となりて、今にも才蔵の帰来らば三日続きの新聞種、珍事の持上がるは定なれど、彼利口ものゝ才蔵なれば、思ひも寄らぬ手を出して二人は泡を吐くべし。女も男も余りの義理知らず、不便なは何も知らぬ才蔵、といづれも此恋を心に憎みぬ。

才蔵と大中好の金太郎といふ芸妓見るに見兼ねて、この概略を悪筆の文して熱海へ知らせければ、読むに一々虚説のごとく、飛でも帰りたさに胸躍り、卒に母の病気と申立てゝ、独り先に立むことを願へば、明日は倶にとあるに其夜は寝ずに明かしぬ。

一日がゝりの道中、肉を拷らるゝほどの捂かしさに、気はいら〳〵と浮かぬ顔を、大尽横目に見遣りて、其事と心可笑き外面を装りて、あの達者なる母親の急病とは、いかさま頼み難きは老の身なり。随分油断なく看病せよ。二三日中には我も見舞に行かむ、と迷惑がる言をわざといへば、才蔵は身を斜に胸をおさへて、癪気と物いはず。やうやう夜に入りて新橋に着きたる時の嬉しさ。大尽を振放して心も空に車を走らせ、自宅へは寄らず金太郎の門に入れば、今お帰りか。待兼ねた待兼ねた、と馳け出づる金太郎は、座敷衣脱ぎかけて帯せぬ褄を摑み、足首に細帯を懸けて引きずりながら、才蔵の手を執りて奥の間に伴ひ、様子は文にて知らせました通り、何ともかともいふやうなき始末。腹が立て〳〵と胸を撫すれば、才蔵は頭巾に乱れたる鬢髪の頬にかゝるを払ひて、夢やら何やら実説とは今に想はれぬ文の様子。余りの事に吃驚して気が脱けたやうなといへば、虚も実も入らぬ、此処でくど〳〵話さうより確実な所を見すべし、と支度するを何処へといへど、何も言はずにと独合点して慌だしく連出し、「磯馴」の奥に今夜もお定例の対坐、と聞に胸轟き、足早に小路二つばかり過ぎて、地理屈竟なる裏町の新道に、九尺の千本格子、磨硝子の軒燈籠に御待合に入りて、客を待つものと帳場に挨拶して奥をと望めば、一間は塞がりたりといふこそ例物の穴、と其座敷を一間置きたる隣房を見立て、酒は余所に耳引立てゝ様子を窺がへば、話声幽かに物の音無く、忍びの首尾に紛れなき気勢。誰とも知るよしあらねば、彼かと才蔵の囁けば、金太郎は眼で応へて、前を庭なる障子を細目に開くれば、此処と

続きの廊下折廻したる行当りの軒に、数竿の竹の蔭になりて、ほの闇き鉄燈籠の懸かれるは手水場なり。

出て来らばと眼を放たで待ちければ、繫糸織の羽織着たる男、此方に気を置きつゝ野鼠々々と現はれて行くを透しみれば、帶から小袖まで我贈りし類とは異れる風俗。これ皆小〆が仕着を悦びて、我を見よがしに着飾れる菊住なり。

滌ぎし手を拭ひ、空を仰ぎて、帶の間より取出でたる時計は、燈籠の火影に耀めく金製に、才蔵も驚きて、小〆といふ女がさほどの内証にてはあらざる理。さりとて菊住があれほどの品を持つべき力はあらず。兎に角小〆が旦那筋から奪取りたるを物したるなどにやあらむ。

今更飽かれた義理にはあるまじき我を棄てゝ、慾に眼が眩れ小〆に見換へたる腹の蓬さ。見下げ果てたる男め、と此処から其面へ唾液吐懸けたき心を鎮め、神妙にしてなほ覗へば、男と入替りに、何やらいひ捨てゝ出でたるは、紛れも無き升屋の小〆なり。

男よりは一倍酔うて乱したる態度。裙はほら〳〵と腰帶緩みて、あぶなき足元長襦袢を踏まへがちに、椽の曲角なる段を辷りて、浅ましくも小気味よき転倒ざま。見るに可笑さを忍びて、いかにすらむと見てあれば、此物音に菊住走出でゝ抱起こせば、見る人のあらじとや、女は甘えて、行けぬゆゑ負ぶ〳〵と舌たるい声を出せば、其をもかしこまりて背を向ければ、どさりと肥肉を載せられて、華車男は蛙のごとく潰れ、片手は柱に縋りつゝ、せり出しのやうに持上げ、ひよろりひよろりと歩めど風にも仆るべき腰状。腹も立やら愛想も尽きるやら、此馬鹿もの、人に愧ぢぬか、と障子をどさ〳〵才蔵の打鳴らせば、此音に驚きて、遁入らむと、慌てゝ躓けば、椽も抜けむばかりに轟かし、沢庵圧して僵れけり。

（五）　天の邪鬼

菊住の小〆に乗換へたるは慾に極まれり。

彼女と我とを較ぶるに数段の相違あり。当時柳橋といへば芸妓は才蔵といふ人こそあれ、小〆といふものはあらじ。品の高下を一々いうて見ば、容色は凌雲閣の百美人に我は二番の女なり。芸にかけては憚りながら宇治の名取、之れだけにても座敷は勤まるべき腕を持てるに、彼れは清元の地とはいへど、搔廻はしてお茶を濁し、得手は大方甚句なるべし。第一座持拙くして大客にうろつき、小勢に照れ、但空騒に騒ぐを芸にして其他を知らず。調子外れて品格といふものなき、旅芸者の骨格と誰やらの穿たれき。とかういふにも及ばず、其位は客種を見て知るゝぞかし。

卑劣き言分なれど、我は十年来曾て土器色の紅裏に肌触れし事無く、小紋の置直しを引張りし事無く、新らしく染むる時は薄色にして、後を濃くして、二度の勤めの襲ねを身に着けし事もあらず。

此等は円助応来の雪見芸者が苦しまぎれの内証なり。これ些細の事なれど、雀の羽色は鶯に似るべくもあらず、鷹は穂を食まざる理にして、彼等と一様にならざる柳屋の才蔵様は、心から外貌まで自然と柳橋芸妓に出来たる正銘物。かゝる御方を色に持つこそ、男と生まれたるものゝ此上無き冥加と三拝して、寝るにも此方へ足を向けず、我尊像を掛地にして、朝夕御酒に玉子酒、供物には鰻鱺の蒲焼を供へ、逢はぬ日も在ますがごとく事ふべきに、本恋といふ事を知らざる男め、我を日本に幾人も散乱にある女か何ぞのやうに想ひ、鯛くひつけたる口に鰯の目刺の摘食ひして旨がる天の邪鬼、冥利を知らぬ奴に才蔵様の難有味を知らせて遣るべし。

腸樽に手足附けたらむやうのものに未練を残し、取るに足らざる度外芸者を対手にして、外に男でも無いやうに騒ぎ立つるは、大人気無きのみか恥辱の上塗ぞかし。

あれしきの男に棄てられ、あれしきの女に奪られたと念へば腹も立てど、牛は牛侶、似合はしき取組なり。あの男一匹恋に渇ゑたる乞食女にくれたと念はゞ、善功徳をしたりと心清しく、更に遺恨も未練も遺らず。但口惜きは、芸者の中の芸者、と人にいはるゝ才蔵が鑑違ひ

して、あの様なるやくざ男に熱せて、よしなき情立て、流しの下の骨を見よと突放されたるを、思ふほどにも無かりし女、と世間の胡笑にならむは、鉛の熱湯を飲まされむより一倍の辛さ。其とても今となりて他人を恨むべきにあらず、身の不束ゆゑと諦むるの外はなけれど、衆に負ける嫌ひの気性には、我為るほどの事は皆是と念ふ意地に、仮にも不束と我をたしなむる事の無念さ。今までの情を捨て、義理を欠き、我を白癡にしたる菊住の返す〳〵も憎さは、骨が舎利になるまでも思ひ知らせでは措かじ。

と思ひさだめて、金太郎の手前焦慮を見せて肚裏を洞察されむは浅ましし、と蔽せども有繋に苛立つを酒に紛らし、彼外にまだ余所行の情夫が二個ある、と平気の顔で洒落のめせば、金太郎は独り歯痒がりて、あれは常用の色か知らねど、どうする了簡か、捨てゝ置いては顔が立つまじ。

外の座敷に人の無きこそ幸ひなれ、二人して彼房へ飛込み、小〆の髻を取りて引まはし、泣顔を撲りつけて、詫証文の代りには、地黒を隠す厚化粧の頬に、こいつ助平と筆太に記し、三日の間其面にて座敷へ出させるやうに屹と談じ、男はこれから家へ伴還り、散々膏血を絞りて一間へ押籠め、三日の間断食させてから、七日が間箱奴につかうて放してやりたし。畜生男めと切歯をして口惜がりぬ。

才蔵は徐かに制して、畜生と思ふた腹の立つことはあるまじ。其様なるはしたなき事して、いよ〳〵衆に嗤はれな。外に思はくもあれば、何も知らぬ顔して胸を撫り、此場は大人しく済まして、近き内になるほどゝいはるゝ事をして見すべし。十郎の台辞ならねど、じつと辛抱しやいのと立花屋の仮声。金太郎もこの不羈に呆れて力を落し、いかなる仕返しの思はくか知らねど、余りといへば張合なきお前の腑効なさ。長年同胞同様の中なる、お前の恥辱は私の恥辱。お前が構はぬとならば強てとはいはぬほどに、私には私だけの一存あれば、必らず構うて下さるな、と立たんとする袂を捉へ、顔を背けて涙を飲み、関係なき他人でさへ、それほどに思ふものを、精神の無きにもあらぬ我身が、何として無念に思はざるべき。お前の腹の癒ゆるほどの仕返しは、きつとして見せうほどに、此場は私に任せて、といかにも屹としたる思附のあり気に見えければ、金太郎も納得して、さらば必ず此儘にはしたまふな。我も柳屋の才蔵なり。

（六）　濡事師

才蔵になほ心残れるや測り難けれども、十が十まで菊住は手に入れたり、と小〆より雛助への報告を、山瀬が取次ぎて大尽まで言上すれば、妙くも為たりとて、この褒美には宝石入の純金の指環を小〆へ遣はされて、此後こそ容易ならざる危所にして、才蔵といふ強敵を相手に持てば、聊かも油断はなるべからず。必ずぬかるまいぞとの声懸りに、小〆は双腕に鼻脂を引きて、「磯馴」の奥に才蔵が此方の始終を見たりと知るほど、花が咲きかけたと勇み立ち、いつかは出会ふ所が曠の勝負、眼に物見せうと心待ちに待ちかけて、先方の女に逸らせ、枝ある角を出させむには、菊住を片時も我側を離さゞるが何より、と早喧嘩買ふ気になりて、此時を大事、と出所ある金銭に糸目を着けず、散るまゝに散らして、色と慾との二重縄に、男の身体をぐる〳〵巻にすれば、才蔵が帰りたりと聞くに、菊住も素が飽きて棄たる訳にあらねば、逢たさも逢ひたし、かの待合にて見られたる、浮気から悋気の口説もして見たさに、隙を覗ひ脱走して、才蔵の格子に声も懸けたしとは思へど、小〆の切なる心にも絆され、且は常浸りに引着けられて、身は網中の魚とは嬉くもあり、心は二つ身は一つ、と屈托顔を小〆に咎められ、それほど才蔵様が恋しくば、三十分ばかり此身体を貸して進ぜますれば、逢うて積る話して、私の悪口を多度いうてござんせ。さりとて一人手放して遣りはせぬ。此方の帯に私の細帯を結着け、彼方所の格子の外から持て居て、奪はれぬやうに番をする。其でも可くば行てござんせ。さあ〳〵と帯際取て小突かれて、手暴な事をしまいぞ。我一人の身体ではないものを、と事古りたる言草は、柔かき手でとん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com